

国際開発研究フォーラム

FORUM OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT STUDIES

研究論文 ARTICLE

途上国の社会運動を行為者の視点から捉える 理論・分析枠組み

— ライフストーリーによる行為の意味への接近 —

近藤 菜月

Theoretical and Analytical Framework to Capture Social Movements in Developing Countries from Actor's Perspective: Approach to the Meaning of Action through Life Stories

Natsuki KONDO

48-4

名古屋大学大学院国際開発研究科
GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL DEVELOPMENT
NAGOYA UNIVERSITY

途上国の社会運動を行為者の視点から捉える 理論・分析枠組み

——ライフストーリーによる行為の意味への接近——

近藤 菜月*

Theoretical and Analytical Framework to Capture Social Movements in Developing Countries from Actor's Perspective: Approach to the Meaning of Action through Life Stories

Natsuki KONDO

Abstract

The purpose of this paper is to construct the framework for capturing the meanings of social movements in developing countries from the grass root actor's point of view. The paper starts with reviewing 'endogenous development theory' which has made efforts to get insight about social change from local people's point of view. It shares common interest with theories of social movement in the sense that both put emphasis on the initiatives of people in the process of social transformation. However, in both theories, the observers tend to apply the premised framework of ethnicity or social class from structural functionalist views, and lack the insight to the subjective realities of people. To overcome this limitation, this paper discusses the theories by Melucci Alberto, who introduced the constructivist view to the analysis of collective behavior. Melucci suggested to capture the multiple meanings of the movement by focusing on individual actors and their processes of interaction. In the later part of the paper, methodological framework is also discussed. This paper suggest employing 'phenomenological sociology' to avoid the observer's assumption, and using 'life story' as a tool to capture the meanings of the movement from actor's perspective.

はじめに

本稿の目的は、途上国における社会運動の意味を、行為者である人々の視点から捉えるための、理論と方法の連続した枠組みを試論として提示することである。

社会運動とは「権力を持たない人々が何らかの公共性をもった目的のために起こす、必ずしも明確なメンバーシップを持つとは限らない集合行動」(重富 2005: 19)などと定義づけられる。特に途上国における運動は、貧しく、被抑圧的な立場に置かれた民衆の主体性に基づく社会変革の実践として捉えることができる。ただし途上国の社会運動の捉え方については従来、貧困問題やガバナンスの欠落といった構造的な問題からその発生の原因を直接導くような分析がなされてき

*名古屋大学大学院国際開発研究科 博士後期課程

た(重富 2007:1)。途上国において、そうした問題が運動のより直接的な原因となるとしても、運動を取り巻く環境を分析するだけでは、運動の発生を十分に説明することができない。なぜなら客観的な動員ポテンシャルが実際の行為に転換されるには、行為者が自分の置かれている環境を主観的に把握し、意味付けをすることによって無力感や無活動を克服するような「認知」のプロセスが必要となるからである(同上:15)。

本稿では、行為者自身による行為への意味付けに注目した A. Melucci の議論を参考に、個々の行為者に接近する理論枠組みを提示し、その具体的手法としてライフストーリーをとりあげる。

本稿の内容は前半と後半の2部に分かれる。前半部では、地域の社会変動を内側から捉えようと試みる系譜として内発的発展論の議論を概観し、その課題と示唆を踏まえた上で、具体的な分析対象としての社会運動に注目し、これまで社会運動についての理論がどのように展開されてきたかを確認する。そして双方が抱える課題が行為者の捉え方にあることを指摘し、「新しい社会運動」論における Melucci の議論から、行為者への接近の方途を探る。その上で、Melucci の視点を途上国の社会運動分析に適用することの有効性を示す。

本稿の後半部では、観察者の観点からではなく、行為者にとっての「主観的意味」を捉えるアプローチについて考察する。従来、運動へ参加することの教育的意義に焦点をあててきた教育学的アプローチは、観察者による「価値付与的前提」の危険を内包していることを指摘し、代わりに「主観的意味」に基づく他者理解を目指した A. Schutz の現象学的アプローチを、本稿の目的に沿う方法としてとりあげる。最後に、行為者の視点から社会変動を捉える具体的な方法として、ライフストーリーが持つ可能性と課題について考察する。

1 内発的発展理論の課題と行為者への視点

1970年代以降、欧米の近代合理主義を問いなおそうとする様々な思想が提起された。その中で、一方的な西欧的近代化の押し付けも見直しを迫られ、開発領域では従来の開発観へのオルタナティブを提案する多様な開発パラダイムが登場した。内発的発展は、そうしたパラダイムの1つであり、当事者の声や内面への洞察を深め、社会変革の方向性を模索しようとする理論的系譜である(江原 2003:30)。欧米では1975年にダグ・ハマショールド財団が発表した『なにをなすべきか：もう一つの発展』報告書に端を発して一連のオルタナティブな開発論が展開され、日本では社会学者の鶴見和子(1989)によって書かれた『内発的発展論』が有名である¹。

1.1 内発的発展と文化的固有性の問題

鶴見(1989:32)は内発的発展を「それぞれの地域の生態系に適合し、地域の住民の生活の基本的必要と地域の文化の伝統に根ざして、地域の住民の協力によって、発展の方向と筋道をつくり出していくという創造的な事業」と定義している。この定義から「内発的発展」には①地域固有の文化に基づくオルタナティブな価値に重点を置く側面と、②地域住民の主体性に基づく社会変革のプロセスとしての2つの側面が含まれていることが分かる。しかし実際には、この2つの

志向が必ずしも同時に成立するとは限らない。地域住民の主体性に基づく地域づくりが、必ずしも文化的固有性の価値を中心に据えたものとは限らないし、その逆も同様である。メキシコの市民運動を草の根の内発的実践として分析した北野(2008:302)は、ポスト開発思想やオルタナティブな価値観を重視する内発的発展の諸理論に共感しつつも、地域固有の価値ばかりを強調する「ナイーブ」な捉え方に対しては注意を促している²。

従来の開発における価値観を「西洋的」とし、非西欧地域の文化の固有性や差異性を強調する議論はともすると、流動的に変化し続けるはずの文化を固定的に捉える視点につながりかねない側面をもつ。例えば、「文化」を無批判に美化することによって、コミュニティの伝統的なシステムや習慣の持つ抑圧的な要素が無視されたり、外からの介入に対する否定的な先入観によって、外在的な要素を利用して共同体内部の歪みを解消しようとする内発的な動きが見落とされたりする可能性がある³。さらに「西洋的」という言葉で語られるイメージも実は、地理上の西洋の社会的現実から乖離した創造物であり、第三世界の知識人が「西欧」というものの存在を措定し、それに対抗する形で自己文化を定義することで、かえって自らの文化的土壌を見失ってしまうことが指摘されてきた⁴。

1.2 内発的発展論における社会プロセスと行為者への視点

それでは、実際の複合的で流動的な社会変容プロセスを捉えるにはどのようなアプローチが可能なのだろうか。

北野(2008:55)は、運動や闘争が基盤とする思想やイデオロギーがあるとしても、「その直接的な源泉は個人の経験・記憶に基づく思考錯誤の学習プロセス」であると述べ、分析対象としての個人に注目する意義を指摘している。特に、エリート層、知識人層ではなく、実践の本来の主体である「農民、女性、若者といった学歴もなければ、財産もない普通の人々」が「なぜ社会運動にあるいは地域づくりに関わるようになったのか」という、個々の行為者の問題意識への洞察から社会変革のメカニズムを立体的に把握することを提案する(同上:109)。またアフリカ研究者からは、政治・経済のマクロな構造と人々の生活世界における創造的営みの両方を射程に入れ、人々を援助の対象者としてではなく、諸条件の中で葛藤し選択する主体として捉える視点からアフリカ社会に対する認識を再構築する必要が提起されている(宮本・松田2002)。

また、それぞれの地域に根付いた「内発的発展」概念を構築する試みの中から、草の根の行為者に焦点を当てる重要性を指摘する声が上がっている。ガーナでこの概念(endogenous development)の普及にとりくむD. Millarもその一人である。Millar(2014;2004)の議論は一見、アフリカと西欧が対立的に論じられているように見えるものの、その背景には、西欧的近代化志向の支配的な開発分野において、アフリカの固有性を強調することで価値観を相対化するねらいがあった⁵。Millar(1996;1992)の内発的発展の考え方はもともと、オランダの社会学者、N. Longの影響に基づく「行為者」の役割への深い洞察から出発している。Long(1989)は農民を階級として統一的に捉えるのではなく、農村地域の発展プロセスを、様々な意図と戦略によって突き動かされる諸個人の相互作用の結果、生じる現象として捉える「アクター・オリエンテッ

ド・アプローチ」を提唱した。これはA. Giddens (1984) の行為主体に関する議論を踏まえ、農民を、「自らの行為に対する他者の反応を観察し、不確定に変化する状況を確認しながら、自分の周りに起こる様々な社会的出来事や活動の動きを常に観察し、そこにどのように介入するかを学び、問題を解決しようと試みる」、「社会的行為者 (social actor)」として捉えるアプローチであった (Long 1989 : 223)。この視点に基づき Millar は、「内発的発展」とは、人々が日常生活の営みの中で行う創意工夫そのものであり、その方向性を誰かが画一的に規定するものではなく、したがって特定の発展の仕方を指すモデルとはなりえない、との考えを示した⁶。これらはガーナにおいて、オルタナティブな開発パラダイムを草の根の人々との関わりを通して模索する中から生成された視点であり、行為者による地域の発展への働きかけと複合的な社会プロセスとを捉えようとするならば、特定の民族や地域住民の構造的・統一的把握の代わりに、環境に対し様々な反応する行為者とその相互作用への視座が必要であるという示唆である。

2 社会運動論におけるパラダイム転換

北野 (2008 : 3) が指摘するように、人々と制度との相互作用に基づく社会変革のプロセスとして内発的発展を捉えるならば、「社会運動」と呼ばれる現象との間に共通性、親和性を認めることができる。民衆の意志表明としての運動への注目、政府主導の議論がなされがちな途上国において、人々の視点から「発展」について考える手がかりとなると期待できよう。

一方、社会学の伝統的な理論では後述の通り、運動が統一的な主体、1つの分析上の単位として扱われ、個々の行為者への視点は必ずしも明確でなかった。社会運動論において、行為者の「差異性」という視座を導入したのが、イタリアの社会学者、A. Melucciである。

2.1 社会運動の理論的変遷と「新しい社会運動」

集合行為・社会運動の理論的系譜は、アメリカ社会学とヨーロッパ社会学との区別に基づいて説明されることが多い (Crossley 2002=2009 ; Melucci 1989=1997 など)。アメリカ社会学では集合的現象は、「アノミー」状態にある群衆が共通の衝動によって引き起こす「集合行動」として理解されることから始まった⁷。アメリカ社会学の伝統が経験主義的な枠組みを採用する一方、ヨーロッパ社会学の古典的な理論は、ヘーゲル学派とマルクス主義の歴史哲学に枠づけられてきた (Crossley 2002=2009 : 25)。この系譜では、運動は構造的矛盾に基づく階級闘争として捉えられ、社会秩序を「自然に与えられた所与のものとは考えずに、争いうる、自らが構築できるものにとらえる」啓蒙主義的な性質がみられる (矢澤 2003 : 59)。

1970年代以降、より多様な要素を内包する運動を捉えるための様々な理論がアメリカとヨーロッパの双方で出現した。アメリカで提起された「資源動員論」は、M. Olson (1965) の「フリーライダー」論などによる修正を経ながら現在も影響力を持っている。Melucci (1989=1997 : 12) は資源動員論が、伝統的なアプローチにおける、「階級利益」あるいは「共有された諸価値」に基づく一般化からの転換を志向していることを認めつつ、政治的側面に焦点を当てているため

に運動の非政治的分野を捉えきれないと指摘する。一方、ヨーロッパでは1960年以降、平和運動や環境運動、女性運動や学生運動といった、それまでの労働運動とは異なる特徴を持つ社会紛争が広がりを見せたことから、これらを「新しい社会運動」と呼び、社会の構造変動と結びつけて理解するための理論化が、1970年代以降に進められた。

「新しい社会運動」論の第一人者として知られるフランスの社会学者A. Touraineは、産業社会から脱産業社会への移行において「新しい社会運動」が新しい価値や規範を創り出す「歴史の担い手」となると期待した。「新しい社会運動」は、ポスト産業社会への移行を促すような「オルタナティブな価値」を提示するものと定義されるが、その価値を「誰が」見出すのかという点について、実は先に指摘した内発的発展論と同様の課題を抱えている。矢澤(2003:17)によると、「新しい社会運動」の代表的論者には、後期資本主義社会の構造矛盾に対応するものを「新しい社会運動」と呼ぶ立場と、行為者の主体的な意味賦与行為に焦点を定めて「新しい社会運動」を説明する立場との2つの立場があり、前者の代表例はC. Offeに、後者の代表はMelucciに見出すことができる。Touraineは、運動の発生経緯を経済的ことがらに限定する伝統的なマルクス主義的分析を批判したものの、社会運動を階級闘争の表現と見なし、そこに歴史形成の役割を付与するマルクス主義的世界観を強固に保持していた。保坂(2012:6)はMelucciが、このようなTouraineの視点は「観察者が運動に対して事前に或る発展性を予期ないし期待しているのではないか」と問題視したと分析している。

Melucci(1989=1997:263)は「集合行為の真理を知っている振りなどしないし、主体にとって何が良いかを知っているなどと言ったりもしない」として、観察者の「価値付与的な前提」、「作者の観点から決定されているハッピー・エンドもしくは悲劇的終末に向かうところの脚本」に従った分析の在り方を批判する。Touraineが「新しい社会運動」という対象をいわば措置し、その内容に注目したのに対し、Melucciはむしろ観察者の側の認識論的転換を促す。Melucciによれば、従来の理論では「運動」という一つの対象が想定されていたが、実際には「運動」という整合的な実体が存在するわけではない。かわりに観察されるのはその現象を構成している具体的な諸個人であり、現象の水面下では、異なる志向を持つ諸個人による様々な次元の行為が同時に働いている。Melucciは、そうした多様な意味・意図・関係性を内包した複合的な「社会構成物」として運動観を提示し、運動の底辺に沈殿する個々の固有の意味を、行為者の次元で探求しようとする。

2.2 行為の主観的意味とアイデンティティ

「集合行為のなかにそれでも存在している個々人の生」(保坂 2013:xxiv)へのMelucciの視点は、社会学者であると同時に心理学者でもあったMelucciの、現代社会に生きる諸個人の内面への洞察にその基盤を持つ。Melucci(1989=1997:138)は現代社会の特徴を、複雑に分化し、情報化が進んだ「複合社会」と規定し、これまで宗教や民族、あるいは制度や職業などによって提供されていた比較的安定したアイデンティティは、複合社会においてその基盤が相対化されたことで、「行為意味を新たに再定義する能力」に特徴づけられる新しい「選択的」アイデンティティによって代えられる、と説明する。

社会変動のペースが加速し、個人が多くの組織に所属し、また個人に投げかけられる可能性や情報が増大したために、今までアイデンティティの拠り所となってきた伝統的な参照ポイントである教会・政党・人種・階級などの権威は弱体化した。『わたしはX, Y, Zである』と個々人が確信を持って言い続けることのできる可能性は、ますます不確かなものとなりつつある。私はいったい何者であるか(傍点ママ)と問い続け、何が自己の生活史の連続性を確証するのかについて再構築することが、ますます必要となっている(Melucci 1989=1997:132)。

このような複合社会においては、人々は所属や地位・出自に必ずしも規定されることなく、個人として、あるいは行為者として、自らの行為の意味に、より自覚的であることを求められる。民族的、文化的なアイデンティティすら、かつてのように所与の揺るぎない基盤ではなく、諸個人が再解釈に基づき選択する基盤として価値をもつ(Melucci・井上 1995:182)。したがって運動の行為者は構造的位置に還元され把握されるべきではなく、運動への参加を、個々の行為者のアイデンティティの揺らぎと再構築との関わりにおいて捉える視座が必要となる。Melucciと同様に、「多元社会における多層的なアイデンティティ」について論じるBerger and Luckmann (1966=1977:289)は、「自分は何者であるのか」という問いの浮上を、「いくつかの可能な世界の間を少なくとも行き来できる力をもっており、選択可能な数多くのアイデンティティが提供してくれる〈素材〉をもとに、計画的かつ自覚的に自我を築くことのできる「個人主義者」と呼ばれるタイプの間人、自律的に自我を構築するような「個人」の在り方への出発点として位置付けている。

3 途上国における社会運動とアイデンティティ

新しい社会運動論は西欧社会の「産業期」から「脱産業期」への移行という文脈の中で展開されたことから、途上国社会への適用に対しては批判もある。例えば重富(2007:30)は、そもそもの基本的な物質的要求が満たされておらず、安全が保障されていないような途上国では、主体による「意味づけ」はほとんど意味をなさず、「アイデンティティを云々する意味は小さい」と指摘する。しかし渡辺(1991:77)によれば、物質的要求などの「低次の欲求」が満たされて始めて、脱物質的な「より高次の欲求」が現れるという論理は「遅れた状態から、より進んだ状態へ」の「一定方向の進化という発想」に基づいており、「近代社会に深く内属する思考様式」に根を持つ。そして、「新しい社会運動」が自明視された価値意識の捉え直しという志向を持つものであるならば、そのような「近代的」価値を適用することは適切でないという(同上:77)。

また、Melucciの提起した問題が、運動という現象自体の認識論的問い直しにかかわっていることを考えれば、過去のできごとに関する研究においてもこの枠組みは適用可能なはずである。現代における複合社会という文脈に基づいて議論を展開するMelucci自身、「産業資本主義の時代においてさえ集合行為が多層的な性質をもっていたことは認め」(1989=1997:251)ている。「集合行為とは常に雑多な性質をいろいろ持っているもの」(同上:250)であるとし、従来の理論で

は見落とされていた「雑多性」を拾い直す歴史的調査の意義にも触れている。このことは、現代西欧社会の運動を的確に把握するという要請の中で生まれた枠組みを、異なる時代や地域の現象に適用することの可能性を示しているといえる。

Melucciのアイデンティティについての議論は実際、途上国における社会運動の行為者を捉える新しい枠組みとして重要な視点を提起している。Melucci (同上: 132) は「私とは何者か?」というアイデンティティの問いは、「伝統社会」では成立しないと述べ、「伝統社会」の事例としてアマゾンの森林にすむインディアンの例に言及する。しかし、Berger and Luckmannの指摘するように「調和が保たれ、自己閉鎖的で、完全に機能している」社会は、実際には「どこにも存在しない」(1966=1977: 179)。アフリカの伝統的なコミュニティ社会といえども、決して外界との交渉のない閉鎖的な空間ではなかった。まして、ヨーロッパによる植民地支配の影響を受けたアフリカでは、「近代化」が決して自然とはいえないやり方で進められた。農村部においては伝統的なコミュニティの世界観が未だ強固である一方で都市部では西欧近代化が進められ、学校教育や外来宗教、西欧医療や外資企業といった異質な要素が浸透していった。植民地支配やグローバル化によって様々な干渉を受けたことによって、全く異なる価値・規範に基づく世界の存在が認識されざるを得ない状況にあった第三世界では、「従来欧米の社会学が自明のものともみなしてきた、伝統社会から近代社会、そして現代社会という線型的進化の見方はもはや自明ではなくなり、異質の社会構成体をいわば共時的に、横に共存するものとしてみざるを得ない」(栗原 1996: 223)。

こうした「多元的状况」によって伝統的社会の「自明化した現実」が揺さぶられ、所与の「現実定義」に対する「懐疑」が強まることによって、Melucci (1996=2008: 212) のいう、「世界と自己との統一的定義を維持するための試行錯誤」が個人に求められることは十分想定できよう。ここに、個人が自律的に自己を再定義し続ける「新しいタイプのアイデンティティ」が浮上する文脈をみてとることができる。

4 行為の主観的意味への接近

ここまでの議論では、途上国の社会運動の分析における、観察者による価値判断を避けるために、個々の行為者に注目し、その複合性を捉えることを提案した。しかし「社会運動の単一性を脱構築ないし解体するため」(Melucci・井上 1995: 178) に個人の内面に向けられた洞察はMelucciの死後十分に引き継がれているとはいえ、「未完の社会学」(保坂 2013: 121) として残され、現在に至っている。そこでここでは、行為者が行為に付与する意味への接近の具体的方法について検討したい。

4.1 教育的アプローチの問題

社会運動における個々の行為者への視座は、経験を通じた個人の主体形成プロセスに注目する学習アプローチに親和的である。北野 (2008: 109) も、行為主体の「学習」プロセスや、なぜ

運動に関わるようになったかという『学び』への動機」に注目する意義を指摘している。

一方、教育学的アプローチの問題を指摘する声もある。例えば保坂（2011：29）は、社会教育学の領域において、個人の内面的変化と社会変革とが予定調和的に論じられる傾向があることを疑問視する。そうした研究では、地域づくりや社会運動を通して達成される行為者の「主体形成」や「意識化」が運動の「教育的成果」として論じられ、実践に関わることの教育的意義を抽出することがあらかじめ前提とされているという。保坂の指摘は、批判的教育学や変革志向型教育の理論が内包するイデオロギー的要素に対してポストモダンの論者からなされてきた批判にも共通している。P. Mayo(1999=2014:11-13)はA. GramsciとP. Freireの教育思想を扱った著書の中で、解放の言説が『啓蒙』のプロジェクト」にその基盤を持ち、たえず「全体化」の言説と化していく危険を有することに対し、ポストモダンのパラダイムが適切な警鐘を鳴らしていることを認めつつも、「人は人間解放を目指して共同で何かを行うことができるという思想」を守るためには、解放の視点を堅持する必要があるとする立場を示している。

教育学的アプローチは、社会変革をめざす主体の可能性を論じる上では行為者を勇気づける意義を持つが、それが観察者による分析の認識論的前提として採用された場合には、Melucciのいうところの「価値付与的な前提」の押しつけによって、かえって行為者の疎外へと繋がりがねない側面を有しているといえる。こうした限界を克服するため、保坂（2011）は行為者への接近の方途を社会運動論に学ぶことができると期待する。しかし先に述べたように、従来の社会運動論では、観察者・指導者の立場から行為の意味を一つの整合性あるストーリーへと統合してしまうという、同様の問題が見られた。ではどのようにして、観察者による価値判断を避けることができるのか。

4.2 現象学的アプローチ：行為の意味連関

「農民運動」「環境運動」といった名称を付され、対象化された行為と、行為者本人にとっての行為の意味とが乖離する感覚について、「私たちの行為と、私たちがその行為を指すために用いる名前とがすっかりこない」と述べるMelucci（1996=2008：1）は、この問題を克服する手がかりとして「現象学的方法」に言及している（1989=1997：336）。その方法では行為の意味は、客観的な因果関係からではなく、人々の「定義を下す」能力において理解されるという。そこで本節では、現象学的社会学の創始者とされるA. Schutzの議論を概観する。

4.2.1 行為の「意味連関」

Schutz（1970=1980：6）は、「他者の行為及びそのような行為の結果の意味を解釈するということは、観察者や行為の受け手の自己解釈を前提としているのではないのか」という批判的問いに立ち、この問題に向き合うべく、「意味の主観的解釈」というM. Weberの公準を引き継ぎ、行為者が自らの行為に付与する意味の理解の方法を追求した。

Weber（1922=1972：8）は、「社会学」を「社会的行為を解釈しながら理解することによって、その社会的行為の過程及び結果を因果的に説明する科学」であると定義する。この前半部分は主観的意味に、後半部分は客観的な因果関係に関わる。これは言い換えれば、内的・精神的過

程と外的過程との相互作用を総合的に理解することを意味する。つまり、彼の主観から独立した外的環境としての歴史的社会的状況におかれた行為者が、動機と意思決定という内的過程を通して、彼にとって有意味な行為をその状況に対して選択し、その行為が環境にはたらきかけることによって、何らかの外的で客観的な結果がもたらされる、というような連関の理解である(佐藤 1976: 20-22)。Schutz(1970=1980: 96-99)は、ここで行為を導く重要な概念としての「動機」を、Weberに基づき、「～するために」という主観的な「目的動機」と「～だから」という客観的な「理由動機」の2種類に分けて考える。Schutzはこれらの概念について、インクの場所を尋ねるといふ行為を例に次のように説明する。

私：「インクはどこにありますか。」相手：(テーブルを指す。) (Schutz 1962=1983: 72)

この時、「私」の「質問する」という行為の目的動機は適切な情報を得るということであり、それが相手にとって「私に情報を提供する」という行為の理由動機になることが想定され、「互いの行為の動機を互いに理解している」ことが自明視されている(同上: 72)。しかし、このとき相手は、「インクを探す」という断片的行為が、別の断片的行為との間にもっている「意味連関」については全く無知である、とSchutzはいう。ここでいう「意味連関」とはどういうものか。例えば「私」はこの時、研究費を取得するにあたってある評議会に提出する申請書を書くために自分の万年筆に補充しようとしてインクを探していたと仮定すると、「インクを探す」という行為の裏には、研究費を取得するというより大きな目的動機があることになる。インク自体は、見つけなければタイプライターを使用してもよく、「研究費の取得」という究極目標が達成されるのであれば、他の行為と代替可能な「下位行為」である。こうした諸々の「下位行為」は、あらかじめ企図された最終目標を達成するためのひとつの手段であるにすぎず、この企図があることによって、一つの単位としてまとまりをもつ。このように諸行為を関連付ける「意味連関」は、行為者本人である「私」にのみ認識されており、外からは見えない。「行為はいつ始まり、どこで終わるのか」、その行為は完遂されているのかいないのかは「私」にはかわからない(同上: 74)。他者が知るのは、他者に対して明示されている断片のみであり、その行為がその中に位置づけられるより高次の文脈は必ずしも把握されないのである。

4.2.2 行為の意味の時空間的把握

以上のことからSchutzは、人が他者の行為の意味を「知っている」と想定している時、実は「理解するチャンス」を有しているにすぎず、その行為によって彼が本当に何をしようとしていたかを理解しようとするならば、観察された行為をもとに、彼の「目的動機」を再構成しなければならない、とする(同上: 75)。それは断片としての行為を、その行為が行為者にとって意味を持つ一連の文脈的な行為連関のなかに位置づけて把握することを意味する。逆にこのような理解なしには、行為者にとっては重要な意味を持つ一連の行為連関を構成するひとつひとつの行為は、観察者からは単なる断片としてしか観察されないために、より可視的な出来事の裏に隠されてしまい、内的プロセスと外的プロセスとの関連は見えなくなってしまう。

ある特定の行為の意味を、その前後の異なる行為との意味の繋がりにおいて捉えることは、行為を時間的な流れの中に位置づけて把握することを意味している。Schutzは、個人の経験は外的世界における客観的時間と、内的世界における持続の両方に関わっていると述べている。前者は測量可能な、万人にとって均一の時間であり、後者では時間の知覚は状況により異なり、不連続で測量不可能である。先の行為の主観的な意味連関は、内的世界における持続において繋がりをもつ。Melucciは、内的なプロセスがどのように客観的に観察可能な現象＝出来事を生み出すかを次のように説明する。

日常生活における数々の体験は、個人の生活の単なる断片に過ぎず、より目に見えやすい集合的なできごとからは切り離され、私たちの文化を揺るがすような大変動からも遠く隔てられているかのように見える。しかし、社会生活にとって重要なほとんどすべてのものは、こうした時間、空間、しぐさ、諸関係の微細な網の目のなかで明らかになる。この網の目を通じて、私たちがしていることの意味が作り出され、またこの網の目のなかでこそ、センセーショナルな出来事を解き放つエネルギーが眠っている。(Melucci 1996=2008:1)

ここでいう「出来事を解き放つエネルギーが眠っている」状態、「顕在化し可視的なものとされている『出来事』の水面下に潜在しつつ、流動し変化し蓄積されている状態」を捉える試みとして、Melucciと新原は「未発の社会運動」という概念を提示している。「未発」、つまり「未だ発したり現れたりしていない」ということばが強調するのは、社会的な大変動からは通常切り離され、「単なる断片」として顧みられることのない「日常生活における数々の体験」が、実は「センセーショナルな出来事を準備する(傍点ママ)」という認識である(新原2015:28)。ここに表れているのは、目の前に観察可能な形で現前している現象を、水面下のプロセスにおいてあらかじめ存在したのものからその現象が多重/多層/多面的に生まれていく「複合的な過程」において理解しないのであれば、その出来事のリアリティを捉えることはできない、という示唆である。日常生活の不可視なプロセスと非分離なものとして「運動」を捉える視点は、社会運動と地域社会の内発的発展プロセスとを関連づける上でも有効であるといえよう。

5 ライフストーリーを用いた行為の主観的意味への接近の可能性

ここまで、行為の主観的意味への接近について、理論的・認識論的次元から考察した。本節ではその具体的な方法として、インタビューを用いる質的研究手法であるライフストーリーをとりあげ、検討する。

ライフストーリーをはじめとするオーラリティを用いる研究法の興隆は、1960、70年代の社会科学における理論的転換を背景としている。50年代にC. W. Millsによって書かれた『社会学的想像力』に始まる個人史への注目の流れの上に、Schutzの現象学的社会学、Berger and Luckmannによる構築主義などの「主観的現実」や「意味」に重きを置く理論が登場し、量的調

査法による実証主義や構造機能主義では捉えられない文化的地殻変動を、人々の声を通して捉える方法として注目を集めた。

5.1 ライフストーリーの特徴：行為の意味への接近

ライフストーリーは「個人的なもの」から出発して「社会的なもの」の把握へと至ることを目指す点にその特徴を持つ。人間を特定の行為や役割で切り取り、構造上の特定の要素に還元して理解するのではなく、ある個人によって生きられた経験の全体的（ホリスティック）な理解によって、当事者のリアリティに接近しようとする。これは、断片的な行為を見るだけでは、その行為が持つ本当の意味を捉えることができないという先の Schutz の指摘にも繋がってくる。日本のライフストーリー研究の第一人者である桜井（2017：63）は、まだ社会学においてオーラリティの重要性が認識されていなかったころに、師である中井卓がある講演の中で、集合行動を例に個人史の重要性を訴えたと紹介している。桜井によればそれは、従来の分析では集合行動としての特定の行為のみに焦点が当てられていたが、その行為は「一人の人間全体の一つの動き」にすぎず、「この一人の個人がなぜこの行為をするに至ったのかは、その人の全体を理解することによってしか把握できない」という主張であったという。これは、本稿の問題意識とも合致する見方である。

D. Bertaux（1997=2003：115）は、先に挙げた Schutz の「理由動機」と「目的動機」に言及し、ライフストーリーによる行為のコースの分析において、この2つがどのように結びつくかを説明している。Bertaux によれば、行為者にとっての機会とは外在的な一連の状況の結果として生じる「理由動機」であるが、この機会をとらえ、自分のライフコースをつくり出すのは行為者自身の行為であり、それは「目的動機」に基づいている。そして「主観的に一貫することを目指した行為のコース」（同上：29）であるライフストーリーの分析によって、客観的な理由動機と、行為者の主観的な目的動機とがどのように相互作用したかを捉えることができるという。

Bertaux は、ライフコースの通時的構造を再構成し、歴史的時間のなかに刻みこむことにより、集合的な歴史的現象と、社会変動のプロセスが個人のコースに与えたインパクトとの相互関係を捉えることが可能となると説明する。しかし、その瞬間に生きられた経験と、後の語りの中に現れる経験とはどのような関係にあるのだろうか。この問いに対し Schutz は、「すでに経験されたもののみが有意味であり、経験されつつあるものはそうではない」と述べる。Schutz（1970=1980：16）によれば、経験は、それが生きられているときには、明確な境界無しに溶け合ったまま流れてゆくにすぎず、既に経過した経験に対して注意のまなざしが向けられる時初めて、経験は「把握され、識別され、際立たせられ、互いに区別され」ることで、意味が付与される。つまり「経験の意味」とは、すでになされた行動を反省的に理解する解釈枠組みそのものであり、それは「回顧するまなざし」においてのみ示される、とする（同上：21）。桜井（2017：77）は Schutz の議論に基づき、ライフストーリーの方法論の中で「体験」と「経験」と「語り」とを区別している。体験はふるまいそのもので、直接捉えることのできないものである。人は体験に意味づけをし、「経験」として捉え直すのであり、語りの中に現れるのは常にこの「経験」である。

このように体験のリアリティとは経験的語りを通して明らかにするべきものである、と説明する。

ここで論じられるような、「行為の意味」に接近する際の時間的側面をめぐる問題は、社会運動論における方法論として十分議論なされていないように思われる。その意味で、ライフストーリーは社会運動の行為者の分析において新たな論点を提起するといえよう。

5.2 ライフストーリーにおける認識論的立場の違い

ただし、ひと口にライフストーリーといっても、研究者のよって立つ認識論的立場の違いによって、「語り」の収集の仕方、扱い方、分析と結論の導き出し方は大きく異なる。ライフストーリーを採用する際、研究者が自身の認識論的立場に自覚的でなければ、理論と方法との間に整合性を欠いた枠組みとなってしまう恐れがある。

桜井(2002)は、ライフストーリーをふくむ上位概念であるライフヒストリーには、①実証主義、②解釈主義的客観主義、そして③対話的構築主義の3つの認識論的立場があるとする⁸。①実証主義は、「真実」のライフヒストリーがあることを前提とし、量的調査を基準とした仮説検証型のデータ収集・分析プロセスを辿り、演繹的な推論の形式を用いる。これに対し②解釈主義的客観主義と③対話的構築主義は、量的調査法の評価基準とは異なる評価基準を用いる。②解釈的客観主義は「分析的帰納法」という「具体的事例の中から抽出される本質的性格は、他の多くの事例においても類似しているはず」であるという考え方にに基づき、社会的現実に関する一般化を重視する。③対話的構築主義とは桜井自身の造語であるが、ここでの「対話」には、インタビュイーとインタビュアーの双方を主体とした相互行為の意味が、「構築主義」には、相互行為やインタビューの場に働く力学を、語りの生成における重要な要素として視野に含める意味が含まれている。先に取り上げたBertauxは桜井の分類では②に当てはまる。Bertauxも桜井も数量的実証主義的に対する新しいアプローチを提示しようとする点では共通しているが、一般性や客観性に対する姿勢においては違いがみられる。例えばBertauxは自身の立場を「客観主義的」(Bertaux 1997=2003:33)であるとし、社会的現実についてのより一般的な理解としての理論的「飽和」に至ることを目指して分析が行われる。これに対し桜井は、「こういう人たちはこうである」と対象を一般化して語ることの暴力を指摘し、「一般化しきれない多様性」の重要性を強調する。

これらの立場の間に明確な境界が引けるわけではなく、その違いをめぐる異なる解釈があり得る(桜井・西倉2017)。大谷(2016:13)は、質的研究には「質的研究スペクトラム」と呼ぶべき連続体があり、その一方の端には、サンプル数が大きく、実証主義的で客観主義的な実在志向の研究が位置付き、他方の端には、小さいサンプルに対して深い解釈を行う解釈学的で意味志向の研究が位置付くと説明する。ライフストーリーの認識論的立場も同様に広がりを持つと捉えることができ、個々の研究者がどの認識論的立場に基づいてライフストーリーを扱うかが重要となる。また、認識論的立場の広がりには方法だけの問題ではない。本稿の前半部で概観した通り、社会運動論のような、特定の領域における理論的系譜の違いにも関わっており、そのため、理論と方法との間の認識論的整合性を意識することが重要となる。例えば、個人による「意味付与」に注目するMelucciの議論は実在志向よりは意味志向の性格が強く、その点でライフストーリー

による深い分析が、「運動」についての新しい「解釈」に結びつく可能性があるといえよう。

おわりに

最後に、本稿で提示した理論枠組みの課題について述べたい。本稿では、途上国の社会変動を内側から捉える「内発的発展論」の課題について述べることから始まり、その手がかりとして社会運動に注目し、その理論の中でも行為者と行為者による行為への意味付与に注目する Melucci の議論を取り上げ、具体的な方法としてのライフストーリーの可能性を検討した。

ここでは、「行為の主観的意味」を捉えるための理論と方法の連続した枠組みの構築を試みたが、その枠組みを実際の研究で実現するためにはさらに様々な問題が浮上すると思われる。そうした具体的な問題の中でどのように認識論的整合性を担保することが可能かということは今後の課題であり、実際のデータ採取と分析を通して引き続き取り組んでいきたい。

もう一つの課題は、個人を強調することが社会運動論としてどのような成果を持つかという問題である。稲葉 (2016) は、社会運動の研究において「アイデンティティ」への注目が高まることにより、社会運動論が個人の「自分探し物語」に読み替えられ、「運動が提示する、社会構造に根ざした争点」が見えなくなる傾向を指摘している。つまり、「運動」というものが個々の行為者のアイデンティティの揺らぎの中に見失われるという危険がある、という課題である。保坂 (2012: 12) も同様の理由から、「行為者に共通する『行為の意味』がいかに確立されるか」を捉える方法を Melucci の研究を踏まえて探らなければならないと指摘する。

一方、先述したように、より解釈学的な質的研究では、小さなサンプルに対し深い解釈を行うことで、現象に「潜在」する新しい意味を見いだそうとすることにその意義がある。したがって理論に対する成果も、従来の実証主義的研究で目指されるような、より多くの行為者に共通する「一般的」で「客観的」な知見とは異なるものとなると考えられる。「意味」志向の研究が集合的な現象としての社会運動に対してどのような研究的知見を提示することができるかについては今後、実際の分析を通して考察を深めたい。

注

- 1 北野 (2007) は、日本語の『内発的発展』に相当する英語は“Endogenous Development”あるいは“Alternative Development”があるが、日本の『内発的発展』という言葉が社会変革の意味を含有するのに対し、英語のそれは政策的プランニングの意味が強く、必ずしもコンセンサスを持って語れる言葉があるわけではないと指摘している。
- 2 北野 (2008) は内発的発展論とポスト開発運動との関係について、前者を強者に含むものと見なす立場と両者を区別する立場があると指摘している。本稿では、内発性、地域固有性、住民の主体性といった、両者の共通性に注目して論じることとする。
- 3 「文化」の両義性はポストコロニアル文学の分野においても重要なテーマであった。栗飯原は C. Achebe の『崩れゆく絆』の解説のなかで Achebe がアフリカの伝統とヨーロッパ近代とを対立項として捉えるのではなく、共同体の変容プロセスにおける外在的要因と内在的要因の複合的な相互作用を描いたとして次のように評価している：「注目すべきは、真っ先に改宗して植民地支配の側につくのが、共同体から抑圧を受けてきた者

- たちであることだ。(中略) アチェベが傑出しているのは、キリスト教と植民地支配の論理を捉えた上で、それを唯一の悲劇の要因とはせず、むしろ触媒として描いているところだろう」(Achebe 1958=2013: 332-333).
- 4 西欧にも労働者階級の人々が存在し、構造矛盾を抱えていることを指摘し、酒井(2001: 32)は「西欧は地図の上では定義不可能であって、世界中の人々の上昇志向の志向方向の先に幻影のように想定されている。(中略) 実態としての西欧はどこにも存在しない」と述べている。また、「真のブラジル文化」を求めた芸術運動モデルニズモを研究した小谷(2001: 221)は、運動の代表的芸術家が、文化の脱植民地化を目指してヨーロッパを攻撃したことを、「亡霊の表層的な布切れ」を攻撃していた、と後悔と共に振り返ったことを紹介している。
- 5 筆者は2015年8月から12月にかけて、国連大学の留学プログラムGLTP (Global Leadership Training Programme)の支援を受け、ガーナのUniversity for Development Studies (UDS)に留学をした。その期間中、Millar氏から指導を受けた。この記述は氏との口頭での議論(留学記録によると2015年11月12日)に基づいている。
- 6 この記述はMillar氏との口頭での議論(留学記録によると2015年9月25日)に基づいている。
- 7 「集合行動 (collective behavior)」という概念は少数の先導者に暗示をかけられ、コントロールされている群衆のイメージに基づいており、のちに「行為者の合理的選択」に重点が置かれるようになってからアメリカでも用いられるようになった「集合行為 (collective action)」という語からは区別される。
- 8 「ライフストーリー」と「ライフヒストリー」の区別は、区の有無を含め、論者によって解釈のばらつきがある(詳しい説明は亀崎(2010)などを参照)。桜井(2002)によれば、「ライフヒストリー」はもともとライフストーリーだけでなく、文献資料などの文字記録を含めた研究方法であり、「ライフストーリー」はオーラリティに特化した手法であるという。本稿では桜井の区別に従っている。

引用・参考文献

- 浅野慎一. 1995. 「生活と社会変革の理論」の発展的継承に向けて」『北海道大学教育学部紀要』65: 143-166.
- Achebe, C. 1958. *Things fall apart*. (=飯原文子(訳). 2013. 『崩れゆく絆』光文社.)
- Berger, P. L. and Luckmann, T. 1966. *The social construction of reality*. New York. (=山口節郎(訳). 1977. 『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』. 新曜社.)
- Bertaux, D. 1997. *Les récits de vie. Perspectives ethnosociologiques*. Paris: Nathan. (=小林多寿子(訳). 2003. 『ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房.)
- Crossley, N. 2002. *Making sense of Social Movements*. Buckingham: Open University Press. (=西原和久ほか(訳). 2009. 『社会運動とは何か』新泉社.)
- 江原裕美(編). 2003. 『内発的発展と教育—人間主体の社会変革とNGOの地平』新評社.
- Giddens, A. 1984. *The constitution of society: outline of the theory of structuration*. Cambridge: Polity Press.
- 濱西栄司. 2006. 「社会運動論の方法論的レパートリーの拡充: エスノメソドロジー・構築主義・分析的括弧入れによる運動研究」『京都社会学年方』14: 59-74.
- Hammarskjöld, D. 1975. *What now. Another Development*. Dag Hammarskjöld Report. Development Dialogue.
- 保坂直人・渋谷治美. 2013. 「社会運動の行為とは何か: メルッチとトゥレーヌの対質」『埼玉大学紀要』62(2): 109-124.
- 保坂直人・渋谷治美. 2012. 「いまを生きる社会運動の行為者: A. メルッチの集合行為論を中心に」『埼玉大学紀要』61(2): 113-126.
- 保坂直人. 2011. 「社会運動に参加する行為者の分析: A. メルッチの集合行為論を通じて」『学校教育学研究論集』24: 29-40.
- 布施鉄治. 1976. 「社会機構と諸個人の社会的労働—生活過程」『北海道大学教育学部紀要』26: 13-75.
- 稲葉奈々子. 2016. 「分野別研究動向(社会運動)—失われた敵対性と「さまよう主体」のゆくえ—」『社会学評論』67(2): 238-252.

- 井上芳保. 2003. 「アルベルト・メルッチ追悼」『現代社会学研究』16: 177-180.
- 亀崎美沙子. 2010. 「ライフヒストリーとライフストーリーの相違: 桜井厚の議論を手がかりに」東京家政大学博物館紀要. 15: 11-23.
- 北野収. 2008. 『南部メキシコの内発的発展とNGO グローカル公共空間における学び・組織化・対抗運動』勁草書房.
- 北野収. 2007. 「「参加」概念をとりまく思想と言説の検討」伊佐淳ほか(編). 『市民参加のまちづくり・コミュニティビジネス編』創成社: 208-224.
- 古谷嘉章. 2001. 「文化の脱植民地化——ブラジル・モデルニズモのレッスン」栗原彬・小森陽一・佐藤学(編). 『知の植民地: 越境する Vol. 6』東京大学出版会: 239-264.
- Long, N. 1989. Encounters at the interface: a perspective on social discontinuities in rural development. *Sociologische studies* 27: 221-245.
- Mayo, P. 1999. *Gramsci, Freire and adult education: Possibilities for transformative action*. Palgrave Macmillan. (=里見実(訳). 2014. 『グラムシとフレイレ 対抗ヘゲモニー文化の形成と成人教育』太郎次郎社エディタス.)
- McDonald, K. 2002. From Solidarity to Fluidity: Social movements beyond 'collective identity' —the case of globalization conflicts. *Social Movement Studies*. 1(2): 109-128.
- Melucci, A. 1996. *The playing self: Person and meaning in the planetary society*. Cambridge University Press. (=新原道信ほか(訳). 2008. 『プレイング・セルフ 惑星社会における人間と意味』ハーベスト社.)
- Melucci, A. 1989. *Nomads of the present: Social movements and individual needs in contemporary society*. Vintage. (=山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ(訳). 1997. 『現在に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店.)
- Melucci, A・井上芳保. 1995. 「社会運動は政治にのみ還元されない 民族性, 文化性, そして「私は誰なのか?」問題」『社会情報』4(2): 173-183.
- Millar, D. 2014. Endogenous development: some issues of concern. *Development in Practice*. 24(5-6): 637-647.
- Millar, D. and Dittoh, S. 2004. Interfacing knowledge systems: Local knowledge and science in Africa. *Ghana Journal of Development Studies*. 1(2): 70-84.
- Millar, D. 1992. *Understanding Rural People's knowledge and its implication for intervention: "From the Roots to The Branches": Case Studies from Northern Ghana*. MSc thesis. Wageningen Agricultural University.
- Millar, D. 1996. "FOOTPRINTS IN THE MUD Re-constructing the diversities in rural people's learning processes" PhD dissertation. Wageningen Agricultural University.
- 宮本正興・松田素二(編). 2002. 『現代アフリカの社会変動』人文書院.
- 中野卓・桜井厚(編). 1995. 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
- 新原道信. 2016. 「A. メルッチの“未発の社会運動”論をめぐる: 3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求(3)」『中央大学文学部紀要 社会学・社会情報学』26: 113-130.
- 新原道信. 2015. 「“未発の状態/未発の社会運動”をとらえるために: 3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求(2)」『中央大学文学部紀要 社会学・社会情報学』25: 23-44.
- クロスリー, C. 西原和久ほか(訳). 2009. 『社会運動とは何か』新泉社.
- Olson, M. 1965. *The logic of collective action: Public Goods and the Theory of Groups*. Harvard University Press. (=依田博・森脇俊雅(訳). 1983. 『集合行為論—公共財と集団理論—』ミネルヴァ書房.)
- 大谷尚. 2016. 「質的研究とは何か—実践者に求められるその本質的で包括的な理解のために—」『学校健康相談研究』13(1): 2-13.
- 酒井直樹. 2001. 「戦争の植民地の知をこえて」栗原彬・小森陽一・佐藤学(編). 『知の植民地: 越境する Vol. 6』東京大学出版会: 17-46.
- 桜井厚・西倉実季(聞き手). 2017. 「インタビュー 対話的構築主義との対話 ライフストーリー研究の展望」『現代思想』3: 60-84.
- 桜井厚. 2007. 『インタビューの社会学: ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚. 2003. 「ライフヒストリー研究における〈インタビューの経験〉」『史資料ハブ地域文化研究』2: 12-21.
- 佐藤慶幸. 1976. 『行為の社会学: ウェーバー理論の現代的展開』新泉社.

- Shigetomi, S. 2009. *Protest and social movements in the developing world*. Edward Elgar Publishing.
- 重富真一. 2007. 『開発と社会運動—途上国における社会運動研究の視座— 発展と社会運動—先行研究の検討—』 アジア経済研究所.
- 重富真一. 2005. 『制度変革と社会運動—理論的枠組みと途上国研究の課題—』 アジア経済研究所.
- Schutz, A. 1962. *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*. Martinus Nijhoff Publishers (= 渡部光(訳). 1983. 『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題 1』 社会評論社.)
- Schutz, A. 1970. *On phenomenology and social relations*. Chicago: University of Chicago Press (= 森川真規雄・浜日出夫紀(訳). 1980. 『現象学的社会学』 紀伊国屋書店.)
- 鶴見和子. 1989. 「内発的發展論の系譜」 鶴見和子・川田侃(編) 『内発的發展論』 東京大学出版会: 43-64.
- 渡辺伸一. 1991. 「脱物質主義的価値と新しい社会運動」 『年報社会学論集』 4: 69-80.
- Weber, M. 1922. Soziologische Grundbegriffe. in *Wirtschaft and Gesellschaft*. J. C. B.Mohr: 1-30. (= 清水幾太郎(訳). 1972. 『社会学の根本概念』 岩波書店.)
- 矢澤修次郎(編). 2003. 『講座社会学 Vol. 15 社会運動』 東京大学出版会.